

Longitudinal Investigation of Scales Measuring Racism toward Zainichi Koreans: Test-retest Reliability, Distinctiveness, and Mutual Effects

TAKA, Fumiaki

Abstract

This study investigated existing scales measuring racism toward Zainichi Koreans (Korean residents in Japan). Specifically, the Modern Racism Scale, the Old-Fashioned Racism Scale, and the Feeling Thermometer were considered. The stability (test-retest reliability) of each scale, distinctiveness from each other, and the mutual effects between the measures were examined using longitudinal online survey data collected from March 2017 to February 2018.

The results showed that all scales had good test-retest reliability. Further, the effect of each measure at Time 1 on the same measure at Time 2 was stronger than the effects of different measures or the effects on different measures. This finding suggests that these scales measure distinguishable concepts. Finally, although distinctive, there were some significant effects of Time 1 measures on the other measures at Time 2.

In addition, although scores of the three measures in this study showed relatively stronger prejudice than a previous study with a student sample, there was no remarkable aggravation or alleviation of racism from 2017 to 2018.

縦断的調査による在日コリアンへの レイシズムの測度の基礎的検討 ——再検査信頼性、弁別可能性、相互作用

高 史 明

目 的

背 景

近年の日本では、在日コリアン（日本に定住する韓国人および朝鮮人）¹⁾に対するヘイトスピーチ（差別扇動発言・表現）が深刻な社会問題として認識されるようになってきている。こうした事態を受けて、2016年には、主として在日コリアンへのヘイトスピーチを念頭に置いた、「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律（ヘイトスピーチ解消法）」が制定されるに至った。

在日コリアンへのヘイトスピーチは、2000年代の初頭に、インターネットを介して流布されるようになった（師岡，2013）。あるいはその背景に、1990年代から2000年代にかけての保守論壇の変容（樋口，2014）を

1) 日本に定住する韓国人・朝鮮人といった場合には、主として日本の植民地支配時代に定住開始の経緯がある者とその子孫であるいわゆるオールドカマーと、近年になって居住を開始したものとその子孫であるいわゆるニューカマーの両方が含まれる。これらの人々に対する認知がそれぞれどう異なるかというのも興味深い問いではあるが、そもそも一般的な日本人がこれらの人々をどの程度弁別しているかという問題もあるため、本研究では特に区別した議論は行わない。一方、韓国人・朝鮮人には、韓国籍や朝鮮籍を有する者だけでなく、民族的には朝鮮半島に由来を持つが日本国籍を有する者も含まれる。国籍および地域籍は、現代の偏見・差別においては重要な要素であると考えられるため、質問紙上では明示的な区別を設け、“在日韓国・朝鮮人”は日本に居住しており日本国籍を持っていない韓国人・朝鮮人を指します”とした上で質問を行った。

指摘することもできよう。こうした現象は、言説空間そのものの性質やそこでの力学という観点からも検討を加えうるものであるが、一方でそうした言説を表出したり、受容したりする人々の信念 (belief) や態度 (attitude) という観点からも検討可能である。

心理学においては、集団の成員性と結びついた特性についての信念をステレオタイプと呼び (Ashmore & Del Boca, 1981)、集団の成員性により抱かれる態度を偏見と呼ぶ (Schneider, 2004)。偏見にはネガティブな態度だけでなくポジティブな態度も含まれるが、社会的に問題とされるのは主としてネガティブなものであり、したがって偏見という語をネガティブなものに限定して定義することもある (Stangor, 2009)。本稿では、定義そのものとしてはネガティブなものへの限定は行わないが、ヘイトスピーチの蔓延のような社会的現象の解明に資することという目的上、専らネガティブなものに着目した分析を行う。

日本において、朝鮮人 (在日コリアンに限られない) に対するステレオタイプや偏見は、伝統的にネガティブなものであった。例えば、原谷・松山・南 (1960) は、調査に回答した日本人の生徒・学生の多くが共有していた朝鮮人に対するステレオタイプとして、“きたനらしい” “くさい匂いの” “だらしなない”などを挙げている。こうしたステレオタイプは、朝鮮人が日本人に比べて劣った性質を持つという内容であると言えよう。

一方で、高は、アメリカでの黒人に対するレイシズム (人種・民族についての偏見・差別) の研究 (e.g., Kinder & Sears, 1981; McConahay, 1986) を援用し、マイノリティの劣等性についての信念にもとづくような露骨なものではない「新しいレイシズム」の相似物の存在が在日コリアンに対しても認められることを指摘している (岸・高, 2015; 高, 2014, 2015; 高・雨宮, 2013)。McConahay らが「現代的レイシズム (modern racism)」、Sears らが「象徴的レイシズム (symbolic racism)」と呼んだ

偏見は、(1) 黒人に対する差別は既に存在していない、(2) 差別が存在していない以上、現在の黒人の恵まれない境遇は本人たちの努力不足によるものである、(3) それにも関わらず黒人はありもしない差別を撤廃するよう主張しつづけ、(4) その結果不当な利益を得ている、という相互に関連する4つの信念に基づくものである。こうした偏見は、「古典的レイシズム (old-fashioned racism)」と呼ばれる露骨なレイシズムを許容しない社会規範が20世紀半ばに成立したことにより、黒人に対する反感が一見レイシズムには見えない隠微なやり方で合理化され表出されるようになったことにより生じたと考えられている (McConahay, 1986; Sears & Henry, 2003)。高による一連の研究は、日本語を用いてコリアンに言及するTwitter上の投稿では古典的レイシズムと現代的レイシズムが頻繁に表出されていること (岸・高, 2015; 高, 2014)、質問紙を用いた検討において、在日コリアンに対する古典的レイシズムと現代的レイシズムは異なる因子として抽出しうること (高, 2013; 高・雨宮, 2013) などを明らかにしている。また古典的レイシズム尺度と現代的レイシズム尺度が、日本における在日コリアンの職業や身分の認知を測定する課題において弁別的妥当性を示すことも明らかにしている (高, 2015)。

本研究では高の一連の研究で検討されてきた在日コリアンへの現代的レイシズム尺度と古典的レイシズム尺度について、偏見の指標としての有用性を示すとともに今後の研究の発展に向けた指針を得るために、さらなる検討を行うことを試みる。

本研究の検討課題

まず一つ目には、レイシズムの測定指標の時間的安定性である。質問紙を用いた高の一連の研究 (高, 2013; 高・雨宮, 2013) では、McConahay (1986) を邦訳し在日コリアンへの偏見に適用した現代的レイシズム尺度

および古典的レイシズム尺度を使用している。また、比較的純粋な好悪の態度を測る指標として伝統的に用いられてきた感情温度を加えて、計3つの測定指標を使用している。しかし、これらの指標を用いた測定結果がどの程度時間的に安定しているのかは、未だ検討されていない。心理測定の上では、同一の指標で同一個人を繰り返し測定したときに一貫した結果が得られないこと、つまり再検査信頼性が低いことは、その指標を用いることへの疑義を投げかけるものと解釈される。あるいは、偏見の強さが安定した個人差ではなく、したがってその心理学的規定因はパーソナリティ、イデオロギー、価値観といった比較的安定した要因よりも、むしろ感情や気分のような比較的変動しやすい要因である可能性を示唆するものである。したがって、レイシズムの測度の時間的安定性は、個人差を仮定し研究を発展させる上で、検討されておくべき問題である。そこで本研究では、およそ1年の間隔を空けて同一個人に対して測定を行う縦断的調査により、偏見の3指標の再検査信頼性を検討する。

二つ目には、レイシズムの3指標の弁別可能性である。現代的レイシズム、古典的レイシズム、感情温度は、いずれもマイノリティへの好悪の感情を構成要素の一つに持つ。したがってこれらは通常、ある指標で偏見が強い者は他の指標においても偏見が強いという相関を示す (Sears & Henry, 2003; 高, 2013)。在日コリアンに対する偏見の場合、特に古典的レイシズム尺度は、感情温度との間に -.60、現代的レイシズム尺度との間に .56 と、比較的強い相関を示した²⁾ (高, 2013)。このことは、3つの指標を感情の比重がより大きいものから認知の比重がより大きいものに並べると、感情温度、古典的レイシズム、現代的レイシズムの順になるという先行研究の主張 (McConahay, 1986; 高, 2013) から理解可能ではあるが、

2) 現代的レイシズムと古典的レイシズムでは数値が大きいほど偏見が強いことを示し、感情温度では数値が大きいほど偏見が弱いことを示すため、相関係数の符号が異なっている。

3つの構成概念の弁別可能性に疑問を投げかけるものでもある。そこで本研究では、縦断的調査のデータを用い、経時的な影響関係において、この3つがそれぞれ独自性を持つかを検討する。具体的には、縦断調査の第1波の各測定値が第2波の各測定値を規定する効果を比較したとき、同一の指標間に存在する効果は、異なる指標間に存在する効果よりも大きなものとなるかを検討する。つまり、経時的なデータにおいて、同じ概念を測定する指標は他の概念を測定する指標とは弁別可能なクラスを形成するかどうかを検討する。

三つ目の目的は、第二の目的とはある程度拮抗するが、異なる指標間の因果効果を検討することである。McConahay や Sears らの理論によれば、現代的レイシズムあるいは象徴的レイシズムは、黒人に対するネガティブな感情を社会的に容認可能な形で表出するために生じたものである (McConahay, 1986; Sears & Henry, 2003)。すなわち、経時的な因果効果としては、より感情要素の比重が大きい偏見（低い感情温度や高い古典的レイシズム）が、より感情要素の比重が小さく認知的要素の比重が大きい偏見（高い現代的レイシズム）をもたらすと考えられるのである。一方で高（2015）は、現在のようにインターネット上の日本語を用いるコミュニティで在日コリアンへの古典的レイシズムが盛んに表出されるようになった理由の一つは、それに先行して比較的容認されやすい現代的レイシズムの表出が流行したことである可能性を指摘している。これは社会レベルにも個人内レベルにも適用しうるが、特に個人内レベルにおいては、現代的レイシズムが強いほど後の古典的レイシズムや感情温度が悪化することを示唆するものとなる。そこで本研究では、異なる指標間での因果効果の有無も検討する。第二の検討事項と統合すると、異なる指標間でも因果効果が存在しうる（各因果効果と0との比較）が、同一指標間の効果は異なる指標間の効果よりも大きい（因果効果と因果効果の比較）であろうという

のが、本研究の予測となる。

これらの主要な目的以外の副次的な検討点としては、まず、縦断的調査が行われた1年間で、偏見の強度がどのように変化したかを検討する。2000年代に進んだと考えられる在日コリアンへの偏見の拡大（高，2015）が今なお進行中であるならば、偏見の強度はこの期間にも上昇していたであろう。一方で、そうした偏見・差別の流行が2013年頃より問題視され、2016年には「ヘイトスピーチ解消法」が成立・施行されていることを考えると、偏見の悪化はピークを既に越え低下しつつあった可能性もある。そこで、両者の可能性を探索的に検討する。もう一つには、調査を行う時点での、偏見の様相のある種の“スナップショット”として、各指標の強度がどの程度のものであるかを記録する。後述するように、本研究はオンライン調査会社に委託してその登録モニターを回答者としたものであり、無作為抽出など代表性のあるサンプリングは行われていない。また、同様に代表性を欠く先行研究の中に、直接の比較が可能なものがあるわけでもない。しかし、ある時点である手法を用いて得たデータの特徴を記載しておくことは、将来他の研究が比較を試みたときにそれを可能にするものであるため、有益であると思われる。

目的の要約

本研究では、縦断的調査により、在日コリアンに対する偏見の3指標について（1）時間的安定性（再検査信頼性）、（2）弁別可能性、（3）相互作用の検討を試みる。

方 法

概 要

2017年3月から2018年2月にかけて、オンライン調査会社に委託して縦断調査を実施した。この縦断調査の主目的は、インターネット上の匿名掲示板や「まとめサイト」（以下総称して「匿名系サイト」と呼ぶ）の利用頻度が在日コリアンへのレイシズムに因果的効果を持つか否かを検討することであった。そのため、それらのサイトの利用頻度の分散の効果を検討できるよう、第1波に先立ちスクリーニング調査を実施し、それらのサイトを利用する回答者が母比率よりも多く含まれるようにサンプルを抽出している。第1波調査実施のおよそ1年後に、第1波調査に参加した回答者のみに対して第2波調査の募集を行い、回答を得た。最後に、上記の手続きに起因するサンプル抽出のバイアスを修正するために、第2波調査回答者のうち一部を抽出し、分析サンプルとした。

なお本研究は、神奈川大学「人を対象とする研究に関する倫理審査」の承認を得て実施された。

回答者

本調査における分析サンプルの抽出手続きを、Figure1に図示した。詳細は下記の通りである。回答者は、各調査への参加に対して、調査会社の規定にもとづき、電子商品券などと交換できるポイントを付与された。

スクリーニング調査 2017年3月に、調査会社に登録している15歳以上の回答者モニターに募集を行い、男女同数ずつで計10,000人の回答を得た。性別および年齢は、調査会社が予め取得していたものをを用いた。スクリーニング調査では、匿名系サイトの利用が週に一回以上あるかないかを

尋ねた。その結果、匿名系サイトの利用者は33.3%、非利用者は66.7%であった。

第1波調査 2017年3月に、スクリーニング調査において匿名系サイトを利用すると回答した者が60%、利用しないと回答した者が40%の比率になるように、日本国籍のモニター2,060名の回答を収集した。

第2波調査 2018年2月に、第1波に回答したモニターに対しておよそ5日間募集を行い、1,383名の回答を得た。

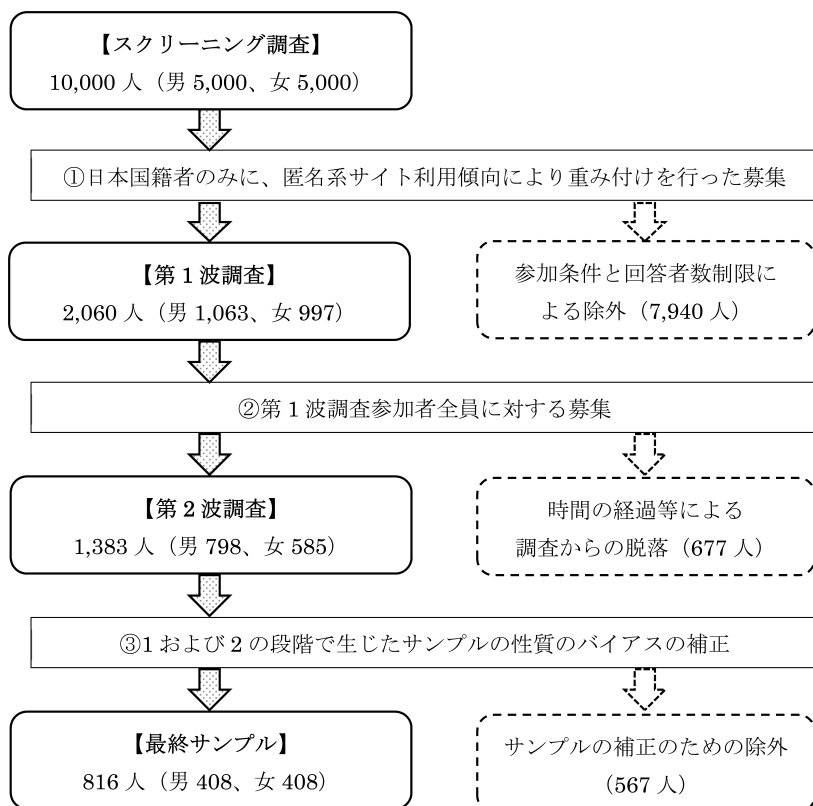


Figure1 サンプルの抽出手続き

分析サンプル 第2波までの縦断調査のサンプルでは、匿名系サイトの利用者が元々のモニターにおける母比率よりも多く含まれている。因果関係の方向性は未解明であるものの、匿名系サイトの利用は偏見の強さと正の相関を示すことが高（2015）によって示されており、そうしたサイトの利用者がサンプルに多く含まれていることは、匿名系サイトの利用が偏見の水準を高く維持することに寄与するなどの形で、結果を歪めうる。そこでこうした影響を取り除くために、第2波に回答したサンプルから、第1波回答時点での匿名系サイトの利用者と非利用者の比率がスクリーニング調査と等しくなるように男女別に回答者の抽出を行った。この際、上記の条件を満たしつつ最も多くの回答者を抽出できるように、各セルからの無作為抽出数を行った。最終的に、男女同数の計816名（第1波時の平均年齢42.0歳、 $SD = 14.0$ ）が分析対象となった。

調査票

スクリーニング調査 「社会意識に関するアンケート」という名称および報酬などの調査参加の基本的条件については、事前に調査会社より回答者に提示されており、回答者は自発的に調査画面にアクセスした。調査の冒頭画面で、調査が“デリケートな項目（人によっては不快に感じるおそれのある項目）”を含むことに加え、調査への参加は任意の段階で中断・撤回できること、研究者は個人を特定できるデータを取得しないことなどの倫理的情報が提示され、回答者が参加に同意した場合にのみ質問画面を提示した。

国籍については、“あなたの国籍は以下のどちらですか？”という質問に対して、“日本国籍”“その他”から選択を求めた。匿名系サイトの利用については、“あなたは、「2ちゃんねる」もしくは「まとめサイト」（2ちゃんねるやTwitterなどを元にしたまとめサイト）を利用することが、

平均して週に一回以上ありますか？”という質問に対する回答を、“少なくとも一方は、週に一回以上利用している”“どちらも、週に一回も利用していない”で求めた。

第1波調査および第2波調査 調査開始前の画面としては、スクリーニング調査と同一のものを表示した。第1波調査および第2波調査で取得した、本研究で用いる指標は以下の通りである³⁾。

古典的レイシズム尺度および現代的レイシズム尺度は、黒人に対する偏見を測定するための McConahay (1986) を高・雨宮 (2013) が在日コリアンに対する偏見の測定用に翻訳・修正し、高 (2013) が因子構造を検討し項目を選択したものを用いた。古典的レイシズム尺度は 6 項目、現代的レイシズム尺度は 4 項目からなった⁴⁾。これらと、本研究では用いられなかった 8 項目からなる女性に対する偏見の尺度 (現代的セクシズム尺度: Swim, Aikin, Hall, & Hunter, 1995) の和訳版を同一の大問とし、計 18 項目を回答者ごとにランダムな順で並べ替えて提示した。回答は、“以下の各項目について、どのように思いますか。なお、質問項目中の‘在日韓国・朝鮮人’は日本に居住しており日本国籍を持っていない韓国人・朝鮮人を指します。”という設問に対して“1. 全くそう思わない”から“7. 強くそう思う”までの 7 段階のリッカート尺度で求めた。

感情温度計は、“以下の様々な集団に対するあなたの気持ちを温度計で

3) 調査票にはこれらに加えて、他の研究で用いるための、インターネットの利用傾向についての詳細な質問、ナショナル・アイデンティティに関する尺度、イデオロギーに関する尺度、マスメディアに対する信頼を測る尺度などが含まれていた。

4) 具体的な項目は以下の通りである。古典的レイシズム尺度：“日本国内で日本人と在日朝鮮人との法的平等を認めようとするのは、間違いだ”、“在日朝鮮人の居住の自由を認める法には、反対だ”、“在日朝鮮人と日本人が結婚するのは、不幸なことだ”、“在日朝鮮人に隣に住まれると、自分と同程度の収入・学歴があったとしても、かなり気にかかる”、“在日朝鮮人は、一般的に日本人ほど知的能力に優れていない”、“持ち主が在日朝鮮人には家屋を提供したいと思ってないときでも在日朝鮮人が家屋を借りたり買ったり出来るようにするための法には、賛成である”。現代的レイシズム尺度：“在日朝鮮人は、平等の名の下に過剰な要求をしている”、“在日朝鮮人達はすでに、不当に高い経済的地位を得ている”、“在日朝鮮人は、教育における差別の解消を求めると称して、不当に強い要求をしてきた”、“政府やマスコミは在日朝鮮人に対して過度な配慮をしている”。高 (2013) より。

表すと、何℃になりますか？”という質問を用い、“在日韓国・朝鮮人（日本に居住しており日本国籍を持たない韓国・朝鮮人）”に加え、アメリカ人や中国人などの外国人、身体障害者やうつ病患者といった外国人以外のマイノリティなど計15種類の集団に対する態度を測定した。回答は、“0度 冷たい／好ましくない”（0点）から“100℃ 温かい／好ましい”（100点）まで、10℃刻みの11段階のリッカート尺度で求め、結果を感情温度とした。本研究ではこれらのうち、在日韓国・朝鮮人に対する感情温度のみを用いる。

第1波、第2波ともに、調査の最終画面では、調査に用いられた項目は社会科学的な関心から問うたものであり、質問項目に示されたような考え方を支持したり広めたりするためのものではない旨が表示された。

第1波と第2波のデータの照合には、調査会社が付した照合用の回答者IDを用いた。

結 果

基礎統計量

第1波調査（T1）および第2波調査（T2）における偏見の各指標の基礎統計量を Table1 に示す。現代的レイシズム尺度および古典的レイシズム尺度は、T1 と T2 の両方において高い信頼性（クロンバックの α ）を示した。

また、各指標については、t 検定を用いた尺度の midpoint との比較も行った。この際、探索的な分析を6回独立に繰り返すことによりタイプ I エラーが生じやすくなるのを防ぐため、Bonferroni 法⁵⁾を用いて有意水準の修正

5) Bonferroni 法は、有意水準の数値を行われる検定の回数で除すことにより帰無仮説の棄却に対して慎重な判断を行うようにする手法である。例えば、 $p < .05$ を有意水準として用い、6回の検定を行うのであれば、 $p < 0.05/6 \approx 0.0083$ のときに有意であると判断する。なおこの手法は非常に保

Table1 基礎統計量

	α	平均 (標準偏差)	中点との差	t 値	T2-T1	t 値
T1	現代的レイシズム	.90	4.27 (1.29)	5.86***	1.69	
	古典的レイシズム	.83	3.79 (1.12)	-5.32***	2.71*	
	感情温度	—	37.7 (23.1)	-15.25***	1.55	
T2	現代的レイシズム	.90	4.32 (1.27)	7.32***	—	
	古典的レイシズム	.84	3.86 (1.12)	-3.33**	—	
	感情温度	—	38.7 (23.3)	-13.80***	—	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

を行った。その結果、T1、T2ともに、現代的レイシズムは中点より有意に高く (T1 : $p < .001$, $r = .20$, T2 : $p < .001$, $r = .25$)、古典的レイシズムは中点より有意に低かった (T1 : $p < .001$, $r = .18$, T2 : $p < .01$, $r = .12$)。したがって、現代的レイシズム尺度の方が古典的レイシズム尺度より数値が大きいという点では高 (2013) と同様だが、平均値は全体的に高く、現代的レイシズム得点が尺度の中点を上回っていた点では異なっている (高 [2013] では、現代的レイシズム得点の7点尺度における平均値 3.70, 古典的レイシズムの平均値 2.97)。また感情温度は、T1、T2を通じて中点 50 よりも有意に低く、差の効果量も中程度以上であった (T1 : $p < .001$, $r = .47$, T2 : $p < .001$, $r = .44$)。高 (2013) における感情温度の平均値が、男子学生で 48.9 ($SD = 23.0$)、女子学生で 56.3 ($SD = 19.4$) とほぼ中点付近であったのに比べると、低い水準である。

さらに、縦断調査が行われた1年間に偏見が増大あるいは減少したかを検討するために、各変数について、T1とT2の差を対応のあるt検定で比較した。ここでも、3回の検定を行うためのBonferroni法による修正を行った。その結果、古典的レイシズムのみ、T2における値の方がT1に比べて有意に高かった ($p = .007$, $d = .07$) もの、効果量は非常に小

守的な方法であり、タイプIエラーを生じにくくさせる一方でタイプIIエラーの可能性を高める。

さく、 $d = .20$ で小さな効果があるとみなす基準 (Cohen, 1988) を下回っていた。

相 関

次に、T1 と T2 における各指標間の相関を Table2 に示す。指標間の全ての組み合わせについて、予測された方向の相関が示された ($|r|s > .45$, $ps < .001$)。すなわち、ある時点のある指標において強い偏見を示した回答者は、他の時点の同一指標及び、同一時点および異なる時点の他の指標においても強い偏見を示す傾向にあった。同一時点内では、現代的レイシズムと古典的レイシズムの間に比較的強い正の相関が示され、現代的レイシズムと感情温度の相関は最も弱かった。これは、最も認知的要素の比重が大きい偏見概念から最も感情的要素の比重が大きい偏見概念へと並べると現代的レイシズム、古典的レイシズム、感情温度の順になるという理論に基づき、指標間の相関関係はこの系列内での近接性が高いほど強いことを示した高 (2013) と同様の結果であった。異なる時点間の相関では、同一指標間の相関は比較的強い正の相関であり ($rs > .63$, $ps < .001$)、異

Table2 指標間の相関

	T1 現代的	T1 古典的	T1 感情温度	T2 現代的	T2 古典的
T1 古典的	.75***	—			
T1 感情温度	-.46***	-.56***	—		
T2 現代的	.70***	.62***	-.48***	—	
T2 古典的	.58***	.73***	-.55***	.76***	—
T2 感情温度	-.46***	-.55***	.64***	-.50***	-.58***

*** $p < .001$

“現代的”は現代的レイシズム、“古典的”は古典的レイシズムの略。長方形枠内は同一時点の異なる指標間の相関。下線は同一指標の異なる時点間の相関。

なる指標同士の相関に比べて大きな絶対値を示した。

T1 から T2 への因果効果

最後に、T1 の各指標から T2 の各指標への因果的影響を、交差遅れ効果モデルを用いて検討した。非標準化係数の比較を行うため、感情温度については数値が大きいほど在日コリアンに対してネガティブな態度を持つことを意味するように値を反転した上で、さらにレンジが1~7になるように変換を行った。推定には最尤法を用いた。分析結果のうち、T1 の各指標から T2 の各指標への効果を、Table3 に示す。T1 の古典的レイシズムと感情温度は T2 の全ての指標に対して因果効果を持ったのに対して、T1 の現代的レイシズムは T2 の現代的レイシズムと感情温度に対してのみ因果効果を持った。

このモデルにおいて、T1 の各指標が T2 の各指標に及ぼす効果は同一変数に対するものが最も強いという仮説と、T2 の各指標への効果は同一変数からのものが最も強いという仮説を検証するために、パス係数の差の検定を行った。ここでは検定にあたり明確な仮説があるため、Bonferroni 法などを用いた有意水準の修正は行わなかった。その結果、T1 のある指標から T2 の同じ指標へのパス係数は、T2 の他の指標へのパス係数より

Table3 交差遅れ効果モデルにおけるパスの係数

		T2 変数		
		現代的	古典的	感情温度
T1	現代的レイシズム	.52***	.06	.08*
	古典的レイシズム	.14***	.57***	.22***
	感情温度	.17***	.21***	.48***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

値はいずれも、T1 変数から T2 変数への効果

も有意に大きかった ($p_s < .001$)。また、T2 のある指標への T1 の同じ指標からのパスの係数は、T1 の他の指標からのパスの係数よりも有意に大きかった ($p_s < .01$)。つまり、T1 と T2 の間で、同一の指標間での時間的安定性による効果は、異なる変数間の因果効果よりも大きかった。

考 察

主要な知見

本研究ではインターネットの使用が偏見に及ぼす影響を検討するために行われた縦断調査のデータを用い、本研究の目的に合わせてサンプルのバイアスの補正を行った上で、偏見の3指標についての検討を行った。

まず、偏見の3指標の時間的安定性についてであるが、1年の間隔を空けた再検査においても、同一の指標同士の相関係数は最も小さなもので .64 と比較的大きな値を示しており、十分な再検査信頼性を示したと言える。複数項目からなる現代的レイシズム尺度と古典的レイシズム尺度が高い内的信頼性を示したことと合わせると、これらを比較的安定した個人差変数を表すものと捉えて研究に用いることには、一定の正当性が示されたと言える。またそうした個人差を規定するものとして、パーソナリティ (e.g., Ekehammar, Akrami, Gylje, & Zakrisson, 2004)、イデオロギー (e.g., Altemeyer, 1996; Pratto, Sidanius, Stallworth, & Malle, 1994)、価値観 (e.g., Katz & Hass, 1988) などの個人差変数を検討することの有用性も示唆されたと言える (パーソナリティおよびイデオロギーの偏見との関連についてのメタ分析として、Sibley & Duckitt, 2008)。

次に、弁別可能性についてである。同一時点内では、偏見の3指標を用いるペアの全てにおいて、ある指標で偏見が強い回答者ほど他の指標でも偏見が強いという方向の相関が見られ、また特に現代的レイシズムと古典

的レイシズムの間では比較的大きな相関係数が示された。このことは、指標同士の弁別可能性に疑義を生じさせるものである。しかし、T1の各変数からT2の各変数への因果効果を仮定した交差遅れ効果モデルにおいては、異なる変数間でも有意な効果が認められたものの、それらは同一変数間の因果効果よりも顕著に小さかった。したがって、横断的調査において現代的レイシズムと古典的レイシズムの弁別的妥当性を示した高（2015）に加えて、3つの指標が弁別可能な概念を測定していると考えられるべき新たな根拠が得られたと言える。

また同じ交差遅れ効果モデルを用いた相互規定性の検討では、現代的レイシズムは一年後に測定された古典的レイシズムに対しては効果を持たなかった一方で、古典的レイシズムと感情温度は現代的レイシズムを含む他の全ての指標に対して効果を持った。感情温度の低さや古典的レイシズムの強さが後の現代的レイシズムを予測するという効果は、マイノリティに対するネガティブな感情を持つ者がそれを社会的に容認されやすい理屈で糊塗したものが現代的レイシズムであるという、McConahay（1986）やSears & Henry（2003）の主張と整合的である。また、日本においては、在日コリアンが日本人や他の外国籍住民に比して不正に大きい特権、いわゆる「在日特権」を得ているという言説が流行しており、そうした言説は排外主義団体に構成員を惹きつけている（安田，2012）。高（2015）はこうした「在日特権」言説は現代的レイシズムと特に関連が深いことを論じているが、より感情的要素の比重の大きい他の偏見が強い者ほど後に現代的レイシズムが強まるという本縦断調査の知見を踏まえると、「在日特権」言説が受容されやすいのは、もともと在日コリアンに対してネガティブな感情を抱いていた人々においてである可能性がある。

一方で、高（2015）は現代的レイシズムが古典的レイシズムを強める可能性を指摘しているが、この仮説は支持されなかった。在日コリアンへの

現代的レイシズムは否定的感情（低い感情温度）をもたらす一方で、在日コリアンの劣等性についての信念（古典的レイシズム）はもたらさないようである。ただし本研究で行われたのは個人内での態度の変容過程に着目した分析であり、インターネット上や保守論壇誌上の言説空間の変化に着目する場合には、「在日特権」言説が盛んに流布されそれが許容されるような社会的規範が変容したことがより露骨な差別的言説の流布をも許容するような変化をもたらした可能性は残されている。また、現代的レイシズムが古典的レイシズムに対する効果を持たなかったとしても、現代的レイシズムはそれ自体が不平等の是正のための政策への反感に繋がるなどの重要な帰結をもたらすものであることが日本国外の研究では示されているため（e.g., James, Brief, Dietz, & Cohen, 2001; Rabinowitz, Sears, Sidanius, & Krosnick, 2009; Tarman & Sears, 2008）、その重要性が否定されたわけではない。

2017年－2018年のレイシズム

本研究では副次的な課題として、2017年初頭から2018年初頭の間に偏見の強さそのものがどのように変動したかも検討した。その結果、3つの指標のうち古典的レイシズムにおいてのみ、この期間に平均値が有意に上昇したという効果が見られたものの、効果量は非常に小さかった。したがって、分析対象となった期間には、在日コリアンに対する偏見には特筆すべき悪化や改善は生じていなかったと考えられる。

ただし、T1、T2ともに、2008年秋から2011年初頭にかけてデータを取得した高（2013）に比べて、3つの指標ともに在日コリアンに対する強い偏見（現代的レイシズム、古典的レイシズムでは高い値、感情温度では低い値）が示された。高（2013）は首都圏の大学生のみを対象に授業中に実施された調査であり、日本全国の登録モニターを対象にオンラインで行

われた本調査とはサンプルの性質も回答者が回答した環境も異なる。またその他にも、変数の測定方法（例えば感情温度は、高 [2013] では視覚的アナログ尺度を用い 1 点単位の 101 段階で得点化されたのに対して、本縦断調査ではリッカート尺度を用いて 10 点単位の 11 段階で得点化された）、報酬の有無、事前に提示された研究目的など多くの点で異なっている。したがって数値の大小を直接比較可能なものではないのだが、T1 が行われた 2017 年に先立つ数年間に日本人の持つ在日コリアンへの偏見が強まった可能性はあると言えよう。今後、先行研究と直接比較可能な手法・サンプルを用いて、2010 年代に起きた可能性のある変化を検討する必要がある。

本研究の限界点と今後の課題

本研究では調査会社に委託してオンライン調査を行ったが、この種の調査では、回答者が省力化のために問題文や選択肢を十分に検討することなく回答する Satisfice 行動が頻繁に見られることが分かっている（三浦・小林, 2015）。Satisfice 行動が、常に同じ選択肢を回答するといった形で表れた場合、それは再検査信頼性、内的信頼性などの回答の一貫性にもとづく評価指標を不当に高め、研究知見を歪めるという結果をもたらしまう。そこで、最終的に分析されたサンプルについて、T1 と T2 のそれぞれにおいて、現代的レイシズム尺度と古典的レイシズム尺度の全ての項目で同じ選択肢を選んだ回答者の数を求めた。その結果、T1 では 8 人、T2 では 1 人が該当した。しかし、現代的／古典的レイシズム尺度と同じ大問内で回答を求めた女性に対する偏見についての質問でも同じ選択肢のみを回答したのは T1 の 2 名のみであり、この 2 名を除外しても結果にはほとんど変化が生じなかった。ただし、上述の方法では多くの項目のうち数個のみで他の選択肢と異なる回答を行うような Satisfice 行動は検出できない。

Satisfice 行動の影響を抑制するための手続き上の改良は必要である。

また、オンライン調査であるという点に起因するサンプルのバイアスも考慮されるべきである。本研究では分析に用いるサンプルを決定する際に、男女比が1:1になり、T1時点での匿名サイトの利用率がスクリーニング調査と等しくなるように、補正を行った。しかし、学生に対する調査においてインターネットの使用時間そのものが偏見の強さと相関することが示されていること（高・雨宮・杉森, 2015）、オンライン調査に継続して回答するのはおそらく特にインターネットへの親和性が比較的高い者であるだろうことを考えると、この手続きでは補正しきれないサンプルの偏りの影響があるかもしれない。縦断的調査が行われた2017年初頭から2018年初頭の間には特筆すべき変化はなかったという知見や、2017、2018年の両時点における偏見の強さそのものについての知見を評価する際には、この点を十分に考慮する必要がある。

引用文献

- Altemeyer, B. (1996). *The Authoritarian Specter*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ashmore, R. D., & Del Boca, F. K. (1981). Conceptual Approaches to Stereotypes and Stereotyping. In D. L. Hamilton (Ed.), *Cognitive Processes in Stereotyping and Intergroup Behavior* (pp. 1-35). London: Psychology Press.
- Cohen, J. (1988). *Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Elbaum.
- Ekehammar, B., Akrami, N., Gylje, M., & Zakrisson, I. (2004). What Matters Most to Prejudice: Big Five Personality, Social Dominance Orientation, or Right-Wing Authoritarianism? *European Journal of Personality*, 18 (6), 463-482.
- 原谷達夫・松山安雄・南寛（1960）民族的ステレオタイプと好悪感情についての一考察. 教育心理学研究 8 (1), 1-7.
- 樋口直人（2014）日本型排外主義：在特会・外国人参政権・東アジア地政学 名古屋大学出版会
- James, E., Brief, A., Dietz, J., & Cohen, R. R. (2001). Prejudice Matters: Understanding the Reactions of Whites to Affirmative Action Programs Targeted to Benefit Blacks. *Journal of Applied Psy-*

- chology*, 86 (6), 1120-1128.
- Katz, I., & Hass, R. G. (1988). Racial Ambivalence and American Value Conflict: Correlational and Priming Studies of Dual Cognitive Structures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55 (6), 893-905.
- Kinder, D. R., & Sears, D. O. (1981). Prejudice and Politics: Symbolic Racism versus Racial Threats to the Good Life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40 (3), 414-431.
- 岸政彦・高史明 (2015) Twitter におけるコリアンに対する日本語でのレイシズム言説：高 (2014) のさらなる分析 国際社会文化研究所紀要 17, 89-102.
- McConahay, J. B. (1986). Modern Racism, Ambivalence, and the Modern Racism Scale. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner (Eds.), *Prejudice, Discrimination, and Racism* (pp. 91-125). San Diego, CA: Academic Press.
- 師岡康子 (2013) ヘイト・スピーチとは何か 岩波書店
- 三浦麻子・小林哲郎 (2015) オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究 社会心理学研究 31 (1), 1-12.
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social Dominance Orientation: A Personality Variable Predicting Social and Political Attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67 (4), 741-763.
- Rabinowitz, J. L., Sears, D. O., Sidanius, J., & Krosnick, J. A. (2009). Why Do White Americans Oppose Race-Targeted Policies? Clarifying the Impact of Symbolic Racism. *Political Psychology*, 30 (5), 805-828.
- Schneider, D. J. (2004). *The Psychology of Stereotyping* (Paperback). New York, NY: The Guilford Press.
- Sears, D. O., & Henry, P. J. (2003). The Origins of Symbolic Racism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85 (2), 259-275.
- Sibley, C. G., & Duckitt, J. (2008). Personality and Prejudice: A Meta-Analysis and Theoretical Review. *Personality and Social Psychology Review*, 12 (3), 248-279.
- Stangor, C. (2009). The Study of Stereotyping, Prejudice, and Discrimination Within Social Psychology: A Quick History of Theory and Research. In T. D. Nelson (Ed.), *Handbook of Prejudice, Stereotyping, and Discrimination* (pp. 1-22). New York, NY: Psychology Press.
- Swim, J. K., Aikin, K. J., Hall, W. S., & Hunter, B. A. (1995). Sexism and Racism: Old-fashioned and Modern Prejudices. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68 (2), 199-214.
- 高史明 (2013) 在日コリアンに対する古典的／現代的レイシズム尺度の確認的因子分析と基礎的な検討 人文研究, 180, 69-86.
- 高史明 (2014) 日本語 Twitter ユーザーのコリアンについての言説の計量的分析 人文研究, 183,

131-153.

高史明 (2015) レイシズムを解剖する：在日コリアンへの偏見とインターネット 勁草書房

高史明・雨宮有里 (2013) 在日コリアンに対する古典的／現代的レイシズムについての基礎的検討
社会心理学研究, 28 (2), 67-76.

高史明・雨宮有里・杉森伸吉 (2015) 大学生におけるインターネット利用と右傾化：イデオロギーと
在日コリアンへの偏見 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 66 (1), 199-210.

Tarman, C., & Sears, D. O. (2008). The Conceptualization and Measurement of Symbolic Racism.
The Journal of Politics, 67 (3), 731-761.

安田浩一 (2012) ネットと愛国：在特会の「闇」を追いかけて 講談社

謝 辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費「縦断的調査による在日コリアンに対するレイシズムの規定因の解明」(課題番号：16K21443)の支援を受け実施された。